

その他

大東島・軍隊労苦体験記

埼玉県 金子 国松

私は大正十年生まれで、家は農家で両親と姉三人と三歳年下の弟の七人家族です。

兵隊検査は昭和十六年四月で甲種合格となり、昭和十七年一月十日東京赤坂の歩兵第一連隊に入隊しました。東京で三カ月の教育を受けて渡満、新京近くにある満州第六七五部隊（第二十八師団第三十六連隊（福井県鯖江））に到着、栗山中隊に配属されました。一期の検閲までの三カ月間は、歩兵としての厳しい訓練を受け、のち擲弾筒班に所属の班員十二人と共に、小銃

と擲弾筒の二種類の兵器の手入れに苦勞しながら軍務に励みました。

兵舎は煉瓦造りの平屋建てで中にはオンドルがありました。食事は大豆混じりの米飯で、お菜は良かったです。

内務班は三年兵が福井県出身者、二年兵は埼玉県出身の現役兵と東京出身の召集兵、そして初年兵は全部埼玉県出身者でした。

初年兵は二年兵と同郷のよしみで可愛がってもらい、また召集兵からも「俺達の世話はしなくても良いから班長の面倒を見てやれ」と言われ大変助かりました。私的制裁がだんだんやかましくなってきた時でもありました……。

私達の部隊は歩兵第三十六連隊で、南京攻略戦のと

き光華門一番乗りで勇名を轟かせたあの脇坂部隊です
から、毎年十二月になると記念の大演習がありました。
た。北滿の十二月は極寒零下三〇度にもなりますの
で、常に凍傷予防のための心得が厳しく教え込まれて
おりました。

大演習が終わり帰營して班内に入る時に、不注意に
も手の指を充分にこすらずに室内に入ったため凍傷に
かかり、新京の第二陸軍病院に入院加療しました。し
かし残念にも左手中指の第二関節から先を切断されて
しまいました。

これで入隊以来目標にしてきた一選抜の上等兵昇進
も夢となり、がっかりしました。六カ月入院加療のの
ち昭和十八年六月退院し、原隊に帰りました。

昭和十九年一月に国境に近い吉祥屯の斉田隊に転属
となりました。隊長は大佐で常時支那服を着ていて噂
では首に十萬円の懸賞金が掛かっているそうです。場
所はソ満国境を間近に眺めるところで任務は毎日朝夕
の二回、河の水を割って厚みを測定して報告すること
でした。

防寒服に身を固め、小銃と十字鍬を背にして国境の
河に行きました。部隊の兵舎は小さなお粗末な木造小
屋です。兵隊も各隊からの寄せ集めで、中隊規模の部
隊でした。

斉田大佐は元中將だったようですが、中將がどうし
て大佐に降格されたのか真相は判りません。

昭和十九年七月、再び第六七五部隊に帰った直後に
部隊動員が掛かり、サイパン救援のため出発しまし
た。しかし七月七日にサイパンが玉砕したため、一旦
奄美大島に上陸待機、そのうち行先が大東島に変更と
なり、戦艦「金剛」に乗せられたまでは良かったので
すが、一個連隊全部が乗ったのでスシ詰めになれ、艦
底に作られたカイコ棚に押し込まれ、悪臭と船酔い
に加えての炎熱地獄に苦しめられました。しかし敵潜
水艦の魚雷に襲われ僅か一日で引き返し、再び奄美大
島に上陸し助かりました。

それからは機帆船（ボンボン船）に分乗し、七月十
八日頃、大東島に上陸しました。途中、幸いにも敵の

妨害には遭いませんでした。

島は小さな島で防風林が海岸にありました。全島砂糖黍畑で埋まり、島民は製糖工場に雇われ生計を立てていました。服装は至って質素で、下着も日本軍が来るので初めて着用するように命じられたそうです。荷物を運ぶ時は手にブラ下げずに頭に載せて運ぶ習慣には驚きました。

島に上陸した時の連隊長は田村権一大佐で、敵前上陸戦のベテラン隊長で片足が不自由でした。

食料は上陸時に持参した米がありました。が、戦争がいつまで続くか判らないので使わずに保存しろのととで全く支給されませんでした。そのうち虫が湧いてガサガサと虫が米を喰う音が聞こえるようになりましたが、それでも最後まで保存していたので復員するまで米を拝んだことはありませんでした。恐らく全部虫に喰われてしまったのではないかと思います。

ですから毎日毎日がサツマイモの食事でした。カタツムリも捕って食べました。島民が飼っている牛を殺した時は軍に骨が渡されたのでしょうか、食事に牛の

骨が出ました。骨に付着している僅かな肉をそぎ取り、骨の髄をしゃぶりました。たまに、今晩はウドンが出ると思いき喜んで夕食を待っていると、出たのはなんと、ウドン一本か二本があるだけ、あとはサツマのツルばかりで、ガッカリでした。

砂糖の島だけあって砂糖だけは豊富でした。野積みされた砂糖の袋がブツブツ燃えていても消す水が貴重品ですから大変です。飲料水はすべて雨水を樋でカメに引き貯めて置いて、防風林から薪を取ってきて沸かして飲むのですが、煙が出ると敵機が空襲してきますので思うように飲み水が確保できません。しまいには軍医さんも「沸かしたと思って飲め」などと言う始末です。

井戸を掘っても塩辛くて飲めませんでした。周囲が海ですから魚は取れそうですが、終戦まで一度も食べていません。塩も海水を煮詰めるのに焚火の煙が敵の目標になるので思うように作れなかったようです。塩にも不自由しました。

終戦になってからは塩班、魚班が編成されて食生活

も少しは楽になりましたが、米は前述のようにお目にかかれませんでした。栄養失調症が流行し、身体にカイセンが出来、全員衰弱し、終戦があと二週間遅れたら全滅しただろうと言われました。

兵隊は上陸後直ちに陣地構築に従事して敵の上陸に備え、ハツバをかけて十字嶽で交通壕と洞窟掘りが連日行われました。

敵機グラマンの空襲が時々あり戦死者も出ました。火葬は夜間、炎が見えないようにしてやりました。兵隊の中にいる僧侶が読経して弔いました。屍衛兵に立った兵隊には泡盛が二本支給されました。

艦砲射撃は沖繩方面から二、三回ありました。夜、照明弾が打ち上げられ、昼間のような明るさの中で射撃があり、弾着地点では八帖一間くらいの穴があきました。

島での服装は上陸当時に着ていた夏服は戦闘用にし、まっつておき、縫工兵が蚊帳の裾を使ってランニングとパンツを作り常用としました。そのため冬服はありませんでしたから、昭和二十年十二月に復員して内地に

着いた時は夏服では寒くて困りました。

終戦のことは昭和二十年八月中旬に天皇陛下の重大放送があるという噂話がありましたが、確実に聞いた者がいみせんから半信半疑でした。中隊長が原子爆弾の話をしたことがありましたが、場所や日時のことは話さず、東京が焼け野原になったと言っていました。

武装解除の時は米兵は来ませんでした。兵器はみんな海に投げました。復員は昭和二十年十二月、南大東島から空母「葛城」に乗り、八日目に呉に着きました。

入隊して東京にいる時に父が面会に来てくれたことがあります。その後、全くの音信不通だったそうです。私が入隊後、見送りに来てくれた人宛に出した礼状は一枚も届いていなかったそうですから、留守宅ではどこへ行ったか判らず、もう帰って来ないとあきらめていたところへ突然帰ったのでビックリして喜んでくれました。

戦争中は農家でも米の強制供出のため自家用の米も

充分ではなかったと聞かされました。

弟も昭和二十年には内地部隊に入りましたが、すぐ終戦になり無事帰っており、家族全員が揃うことができて何より幸いでした。

迫撃砲第四中隊

沖縄戦に散華す

千葉県 石田 淑 孝

私は、昭和十九年九月十日、群馬県利根郡沼田町を原隊とする「東部第四十一部隊」で編成された独立迫撃砲第四中隊第二小隊の第六分隊長として、原隊の沼田を出発した。九月二十五日門司港で「万生丸」に乗船、十数船の船団の左側二番船として出帆した。初めてみる船団の威容は堂々たるもので、「ああ堂々の輸送船」の軍歌を想い出された。

出航二日目の明け方、船上がにわかに騒がしくなった。「左舷側方航跡発見」監視兵の怒号である。恐れ

ていた敵潜水艦の魚雷攻撃である。左舷方向から、長さ三・四メートルの魚雷が白い泡状の航跡を引いて「万生丸」に向かって突進して来るではないか、運を天に任せて、ひたすら息詰まる思いで魚雷を睨むよりはか処置はなかった。幸運なるかな魚雷は「万生丸」の直前を横切った。「助かった!」と思った瞬間、この魚雷は右舷を進んでいた輸送船の後部に命中、鈍い爆発音と共に十数メートルの水柱を上げて轟沈である。続いて我が船の右舷後方を進航していた輸送船も、船の中央に魚雷が命中し、巨大な水柱を上げ一、二分にして沈没した。

この時、私は船首におり、前方を通過した魚雷だけに気をとられていたが、「万生丸」の後方を一発の魚雷が通過したというのである。我々が一発の魚雷を発見し僅か四、五分の間にこの大惨事が起こったのであった。瞬時に僚船二隻の轟沈を目撃した我々は、魚雷の恐ろしい威力に声も出せず呆然としていたが、「ああ俺は助かった」との安堵感と共に、まだ信じられぬ悪夢を感じた。